

戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えるのは
私たちの務め

岩本 信子

私は昭和十六年の秋、太平洋戦争と同じ年
に生まれました。

けれども戦争にまつわる思い出はほとんど
持つてはおりません。ただ一つ、今でも目を
つむるとすぐに浮かんでくるのは、あるお宅
の屋根から床に向けて四角な黒い大きな穴が
開いていて、そのふちが黒く焼け焦げていた
ことです。「あれ、なあに？」と祖母に尋ね
ると、「あれは焼い弾という爆弾が落ちた穴
。」と言われ、何ともいえない怖さで、そこか
ら目を離すことができませんでした。そして
その黒い大きな穴から小さな青い空が見えて
いたのも、なぜか頭にこびりついて離れませ
ん。今でも、戦争という言葉を目にするとあ
の穴が頭に浮かび、身ぶるいまでが、よみが
えってくるのです。

私は、早くに両親と別れ、祖母の命がけの奮闘のお陰で、戦争のつらい思い出をほとんど持つことなく育てられたのですが、それだけに祖母の苦しみやひもじさが今身にしみてしのばれます。

かつて、私が祖母に戦争中の話をしてほしいと、せがむと一つか二つ聞かせてくれることがありましたが、きまっつてその後には、「どんなことがあっても、お前にだけは三度の食事と白い御飯を食べさせた。」と胸を張って言っていました。それがどんなに大変なことであったかは到底計り知ることはいできません。そんな話の一つに次のようなことがあります。

あるいなかへ買い出しに行き、大切な着物を何枚もお米に替えて背中にかつぎ、祖母は幼い私の手を引いて、満員列車に揺られ梅田の駅へ降り立ったとたん、お巡りさんに声をかけられ、買って来たばかりのお米を全部没収され、泣くにも泣けない気持ちで、茫然と

たたずんでいた。といかにも悔しそうに話してくれました。

その後、盲学校に入ってから、戦争の犠牲者の話や満州から引き揚げて来られた音楽の先生の苦勞話を聞かせてもらったり、運動場に防空壕を掘った戦時中の話、前庭でお芋を作って飢えをしのいだ寄宿舎生たちの話を聞きながら、「人間はなんてたくましい存在であろうか。」と、改めて感動した次第です。

それに比べると現在はあまりにも、くだらないことで生命の軽視がはなはだしく、また、物資に対しても粗末にする生活がまんえんしすぎてはいないでしょうか。白い御飯と黄色いカボチャのありがたさを、そして一日一日が無事安穩に暮らせるありがたさを忘れてはいないでしょうか。

私たちは、この平和のありがたさを、そして無意味な戦争の恐ろしさこそ、子供や孫たちや子孫へと永遠に伝え続けて行かねばなりません。それが私たち少しでも戦争の悲惨さ

を知っている者の務めではないでしょうか。